

震災からの復興活動に取り組むリーダーを、  
短期・中期・長期の3つのフェーズで支援します

# 震災復興リーダー支援プロジェクト

Support our Disaster Recovery Leaders - Relieve, rebuild and re-start Japan

経過報告レポート (2013. 3. 12-2013. 6. 11)



## Contents

- P.1-3 東北の担い手インタビュー
- P.4 派遣先プロジェクト公募
- P.6-8 震災から3年目、2013年度の方向性
- P.9-10 今季のトピックス
- P.11 プロジェクトの進捗・ご支援ご寄付のお願い

## 1 東北の担い手インタビュー

まもなく創業100年。昭和シェル石油の特約店として、地域への燃料供給を支えてきた気仙沼商会。高橋正樹社長は復興市民委員会の座長も務められ、このまちの再生に向けて日々走り回っています。2012年には気仙沼市、気仙沼信用金庫とともに新しい会社を立ち上げ、木質バイオマスエネルギーによる持続可能な地域エネルギーの普及・事業化、その先には「気仙沼スマートシティ」を見据えた挑戦を始めています。日本では成功事例がないという難しい事業になぜ挑んでいるのか、その背景・想いを高橋さんにお伺いしました。

—まず気仙沼の町の魅力についてお聞かせいただけますか。

スローフードの町で、山と里と海が50とか100メートルの狭い距離の中にあるんですよ。日本海側の景勝地に東尋坊という岩壁があるけれども、気仙沼はこういう景色の連続なんです。

そして、見た目だけじゃなく、生活が山と海と密着しています。昔は山で切った木材で船を作っていましたし、山のこの木を燃やすとエネルギーとなる火ができたります。三陸の海のめぐみがあって食べ物もうまく、遠洋も近海も養殖もやっています。食べ物にも生活にも文化があって、いい場所なんですよ。

—なぜこの「気仙沼スマートシティ」の事業を始めたのでしょうか。

ある熱心な方にほだされたのが発端で、地域に再生エネルギーを導入すべきだなと考え始めたんです。気仙沼は、ESD (Education for Sustainable Development) と呼ばれる持続発展教育のメッカでもあるんですよ。森と海と里が繋がっているこの町で、山のひと海の人々がエネルギーを通して協力していけるのはいいことだなと思って。山って、本来は30年50年と時間をかけて育てないといけないんです。その間に2回は間伐をする必要があるのだけど、日本の木の値段がさがってしまったので、間伐材を切り出すことが割に合わなくなってしまいました。手が入られないまま放置されている山は、気仙沼もそうだし、それこそ日本中にあります。気仙沼は林業が盛んだったわけではないけど、復興計画をつくる中で、教育だとか医療だとか、暮らしのカタチを根本から考える中で、再生エネルギー、持続可能なエネルギーを創っていくということが、ひとつのテーマになってきて。再生エネルギーというのは素人だったけれども、木質バイオマス事業はこの町じゃないと出来ないかもしれないなあと思ったんですよ。

一再生エネルギーに関しては素人とのことでしたが、立ち上げは大変でしたか。

日本の関係機関を3カ所くらい紹介されて、行くとこ行くところ「やめたほうがいいですよ」と言われました。やれている方法を探して見つからなかったらやめようと思って、アメリカやヨーロッパの海外事例を探してもらいました。そうしたら、海外には上手くいっているところがあって、気候の違いとかはあるかも知れないけど、やっていけるのではないかと。方法があるならやろうと、ここまでずっとやってきました。そうしたら、去年(2012年)の秋頃かな、技術提携しようとしているところから、「実はうまくいってないらしいぞ」という話が入ってきました。慌てて現地に行きました。そうしたら僕が想像してたよりも規模が小さかったけど、きちんとやっていて。突然訪問したわけだけど、包み隠さず見せてくれて、こういう人たちとだったら信頼できるパートナーとしてやっていけるなと。

一どういふ点が日本で初めてなんでしょう。

近隣地域の木材供給で賄える発電プラントということです。国内でこれまで成功しているのはもっと規模が大きなタービンを回すプラントなんです。小さい規模だと木材をガス化してガスエンジンを回すプラントになるんですが、この成功事例が国内には殆どないんです。地域の間伐材でできる規模でやるから持続可能なわけで、地域のもを地域で消費しましょうっていうのが今回の事業の根本にあるべきと考えています。その結果成功すれば、日本で初めてのプラントであり、ケースになるという事なんですよ。

エネルギーを使うのは、ホテルとかですね。あとは水産加工屋さんとか、そういうところでも熱エネルギーが使えないかなあと思っているんですよ。今回のプラントは夜も動くので、熱エネルギーを24時間必要とする施設と相性がいいということになるんですけどね。あと、今回の事業から派生して、ストーブの燃料として分けてくれないかという声が多いんですよ。ホームセンターで薪が袋に入って400円で売っているんですけど、山の手入れをしながら産出される間伐材を有効活用すれば、まちの人にもっと格安で供給できたりします。これまで手間賃にもならないから、木材を運び出さないまま捨てたり、切らずに放置して太くなるまで待とうとしていたけど、もっと地域の中で使っていきたい。地域通貨によってやり取りしていけば、地域で更に財が循環しますね。



一いろいろな仕組みを一貫してやっているんですね。

山の人達から、プラントから、エネルギーを使う人も、携わる人も、そこから生まれる対価を使う人も、皆が理解して動かないと、どこかが止まってしまったら、全部が動かなくなってしまうんですよ。『みんなで』っていうのがこの事業のキーワード。間伐材の切り出しも植樹でこういう山にしていこうとかも、みんなで関われる。地域通貨も、まちの店舗が関わっていけるでしょう。そこに、まちのみんなが共感するんじゃないかな。そういう意味でとてもいいなって思うし、将来はとにかくいろんな事が起こるんじゃないかなと思いますよ。調査事業からはじめて、山を持っている人たちを集めた講習会を何度も開いて。20~30人ぐらい集まってくれればいいかなと思っていたら80人ぐらい来てくれて。山持ちの人たちも、爺さんから山を受け継いだけど、どこにあるかもわからないとか、わかってどう木を伐り出しているかわからないとか、チェーンソーの扱い方もわからないという人が大半でしたね。軽トラックぐらいが入れる林道の作り方とか、女性も含めて、みんな楽しそうに学んでくれました。それからテスト事業として、月2回ぐらい間伐材の買い取りを始めて、ようやく少しずつ動き出してきました。



—今の右腕である後藤さんは、地域のみなさんとはどういう感じですか。

後藤さんは、ざっくばらんだし、突拍子もないこと言ったりして面白くて、地元の人から人気がありますよ。彼女もつなぎを着て、チェーンソー持って、ヘルメットをかぶってやっています。少し時間はかかりましたが、馴染むのも早かったですね。田舎は、都会よりも人間関係とかがやっぱり難しいんですよ。高学歴の人でも、馴染むのに半年くらいかかりました。英語が喋れても気仙沼語は最初わからないですからね(笑)

—新しい右腕には、どういう役割を担ってもらいたいですか。

いよいよ全部プラントも整って、あとは動かすだけです。そのプラントの管理を担ってトータルコーディネートしていく人が必要なんですよね。緊急事態が起きた時に海外とやりとりをしたり。僕は残念ながら英語ができないので、通訳を頼んで質問しながら進めています。

プラントが実際稼働するのは来年の3月位の予定です。持続発展可能な電力供給モデルをつくっていくことにトライアルするんだから、非常にやりがいはあると思います。

—右腕は、外から何かを持ってくる意味合いもあると思うんですけど、これを持ってきてほしいなということはあるですか。

特にありません。あえて言うなら、『都会にないものが沢山あるはず』って思える好奇心を持って来てもらえたらいいと思います。

これからも応援しています。ありがとうございました。

聞き手：山内幸治(NPO法人ETIC.事業統括ディレクター)

文：田村真菜(NPO法人ETIC.)



ETIC.では、東北の地域課題解決型のプロジェクトに取り組むリーダーのもとに、その「右腕」となる人材を派遣する「右腕派遣プログラム」を実施してきました。これまで84プロジェクトに、151名以上の右腕を派遣しています。

しかしその一方、東北にはまだまだ多くの人材ニーズがあります。東北に人が集まる流れをこれからも続けていくために、今回、東日本大震災の災害復興支援のために活動を行っているap bank Fund for Japanと連携し、“ap bank x ETIC.右腕派遣プログラム”を協働で始めることになりました。本プログラムではプロジェクトの公募を実施し、採択された取り組みに対して右腕派遣を実施することで事業推進を支援し、東北の新しい「希望」を育てていきます。ap bank とETIC. が連携して情報発信のサポートを行うことも、特徴の1つです。

## ■第一期プロジェクト



**交流型地域活性化  
プロデュース**

4つの事業創設による地元雇用の拡大と、南三陸内外の交流が生まれる仕掛けを発展させていく。



**放課後学校  
「コラボ・スクール」**

小学生～高校生を対象として、東北の未来を担う子供たちの居場所と学び場を作る。



**三陸ひとつなぎ  
自然学校**

ボランティアツーリズムによる地域住民との交流を通じて、釜石を支える基盤を構築し、釜石産業全体の復興に寄与する。



**女川町復興  
連絡協議会**

事業再建に苦しむ事業者の再建と、新規事業に取り組む事業者のサポートを行う。



**まちフェス**

地域住民と若者の対話と協働を通じ、社会課題解決に向けたチャレンジのできる地域を創造する。



**東北ROKU  
プロジェクト**

雇用創出を目指し、東北から新しい日本の農業のあり方を発信する。

## ■第二期プロジェクト



**一般社団法人  
「東の食の会」**

東日本の農業・漁業・食品加工業の復興と、生産者、加工業者の雇用を創出する。



**森里海工房  
プロジェクト**

気仙沼の自然の恵みを活かした商品の企画販売と、自然生態系の保全活動を行う。



**ソウルオブ東北**

東北の食文化の発展と郷土愛創出を目指して、東北の食の可能性を考える。



**未来志向型高校生  
インターンシップ**

教育・行政・福祉・企業と連携し、高校生の強みを活かした働きかけを行う。



**蛤浜プロジェクト**

人と人をつなぐ浜、ふるさとの新しいカタチを作るために、この浜の自然と風土・文化を活かした施設や企画を作る。

## 「ジョンソン・エンド・ジョンソン×ETIC.右腕派遣プログラム」

震災から2年が経過する中で、情熱と志を持つ東北のリーダーたちによる新たな「仕事づくり」への挑戦も始まってきました。一方で、それらの挑戦が実を結んでいくためには、ビジネスの専門性や経験を持つ経営人材の必要性を耳にする機会が増えました。この課題を解決するために、東日本大震災からの復興のために活動を続けているジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社と連携し、「ジョンソン・エンド・ジョンソン × ETIC.右腕派遣プログラム」を協働で始めることになりました。本プログラムでは、東北の新しい「仕事づくり」を牽引するプロジェクトの公募を実施し、採択された取り組みに対して右腕派遣を実施することで事業推進を支援し、東北の新しい「仕事」を育てていきます。

### ■ テーマ

#### —被災地の方々の「健康」に寄与する事業の創出・拡大を応援します—

ジョンソン・エンド・ジョンソンでは、基本理念である「我が信条(Our Credo)」の第三の責任である「地域社会への貢献」を果たすため、「人々の健康」テーマにした社会貢献活動を行っています。

ジョンソン・エンド・ジョンソンがとりくむ「人々の健康」は、単に病気の有無だけを指すものではありません。私たちを取り巻く環境や、衛生状況、健やかなところとからだ、人と人の暖かなつながり、支え合う地域社会、など、健康には様々な要因が関わっています。ジョンソン・エンド・ジョンソンは、幅広い視点から「人々の健康」を高めるプログラムを支援しています。

#### 【健康】

病気のあるなしだけではなく、社会のあり方や、その人の置かれている環境が、その人の心と体の健やかさにつながります。

被災地の方々の「心と体の健やかさ」に寄与する事業の創出・拡大を応援します。

#### 【事業創出・拡大】

被災地域での雇用創出や、周辺事業者への経済機会創出(木質バイオマス事業により地域の林業家への収入機会の提供)など、地域の経済に貢献する持続可能な事業を生み出すことが期待されています。

活動女性ではなく、人的リソース等を新たに投入することにより、より大きな雇用や経済機会創出に寄与することを目的としています。

東日本大震災から3年目を迎え、はやくもその最初の四半期が終わりました。メディアでの報道機会も大幅に減る中、2013年6月15日に開催した「みちのく仕事マッチングフェア」には、今回もまた100名を超える方々にご参加いただき、まだまだ続く東北の復興に、これから出番を感じていらっしゃる方々の存在は、東北のリーダーの皆さんや、私たちにとっても、大きな励みとなりました。

### ■第2期中長期計画（2013-2015）を策定しました。

私たちは、当初2011年からの3ヶ年を目途にした活動方針を立て、「5年後も10年後も若者たちが集い、起業家精神溢れる東北へ」をミッションに、震災復興リーダー支援プロジェクトに

取り組んで参りました。また2012年度には、新たに2つの重点テーマ（「ハブ機能」の強化と、「復興モデル」の推進）を設定し、効果的なプロジェクト展開を目指しました。

その方向性に手応えを感じつつも、一方で中越大震災など過去の震災からの復興への歩みなどを学ぶ中で、改めて復興への歩みには、スピードが求められると同時に、一定の時間をしっかりとかけることこそが、地域の真の力になることも感じています。

そこで私たちとしましても、当初の3ヶ年計画を見直し、新たな中長期計画を策定することに致しました。昨年度から掲げている2つの重点テーマを、更に力強く推進し、具体的成果を生み出していくことで、復興を起業家精神溢れる自立のスパイラルに、そして、「5年後も10年後も若者たちが集い、起業家精神溢れる東北」が実現されていくことに、貢献していく所存です。

## ■ 3年間の活動方針

### 2つの重点テーマ

(1) 各被災地の住民主体の挑戦を支える「ハブ機能」の強化

(2) 産業やコミュニティの「復興モデル」となりうるプロジェクトの推進

#### 活動方針① 成果への貢献

東北で始まっているリーダー・起業家らによる事業・プロジェクトが、目指す成果を生み出していくために、

- ・ 「右腕派遣」をこれから3年間で合計150名実施します(5年で合計300名)。
- ・ ハンズオン支援を強化し、ともに「ハブ機能」や「復興モデル」の「成果」にコミットします。
- ・ 専門性を持つ他団体との連携を強化し、リーダー・起業家を支える体制を構築します。

#### 活動方針② 成長への貢献

東北のリーダー・起業家をはじめとし、そのスタッフや派遣している右腕たちが、成果を生み出していくために必要なスキル・能力を獲得していくために、

- ・ 東北に「学びのコミュニティ」を生み出すことに取り組みます。
- ・ マネジメントやチームビルディング、その他スキル獲得のための研修プログラムを実施します。全国や世界の先進事例視察ツアーも開催します。
- ・ また将来の東北を担っていく地元の若者たちへの成長機会創出にも取り組みます。

#### 活動方針③ 仕組み化への貢献

東北の復興は10年以上の長期戦になっていきます。東北のリーダー・起業家のまわりに、5年後も10年後も必要な仲間が集まるための仕組みづくりのために、

- ・ 東北の中間支援団体、復興庁、民間企業、財団などとの連携を強化します。
- ・ 特に「民間企業からの人材派遣」や「大学生による東北でのインターンシップ」等の仕組み化に貢献します。

## ■ 右腕派遣プログラム(対象:被災地域リーダー、都市部の社会人)

各プロジェクトの「成果」、リーダーや右腕の「成長」、地域の「変化」を支えるプログラムへと質的向上を目指します。具体的には、一般社団法人APバンクなどの専門性を持つ他団体との連携を進め、さらには右腕派遣プログラムの体系化、リーダー研修を新たに進めていきます。より地域に「変化」をもたらすための協働体制を確立していきます。また2つの重点テーマに基づき、「ハブ機能」の強化や、「復興モデル」の創出を意図した右腕派遣を更に進めます。

【目標】10地域30プロジェクトへの派遣、年間50名の右腕派遣

### ◆ Johnson&Johnson×ETIC.右腕派遣プログラム

ジョンソンエンドジョンソン株式会社と連携し、「被災地の方々の心と体の健やかさ」に寄与する事業の創出・拡大を支援。専門家らとの定期的な戦略会議も実施し、モデルとなる事業の創出を目指すプログラムです。

### ◆ APBANK×ETIC.右腕派遣プログラム

一般社団法人APBANKと連携し、東北に新しい「希望」を生むプロジェクトを支援。支援先にはAPBANKによる広報支援やデザイナーなどの専門家派遣も実施します。

## ■ みちのく起業(対象:被災地域で新規スタートアップを目指す方)

東北でのチャレンジを応援する苗床を生み出すため、起業家コミュニティの醸成を目指します。合同戦略会議や集合研修の機会提供によって、既に形成されつつある起業家コミュニティの継続に向けたサポートを行います。特に被災地で「ハブ機能」を担う団体と協働して取り組むことで、被災地の「ハブ機能」の強化に貢献します。

【目標】年20～30件のスタートアップ支援、

### ◆ みちのく起業アントレプレナー養成講座

新たに東北で起業を目指す若者のスタートアップを支援。事業計画書講座、先輩経営者らによるメンタリングのほか、調査・マーケティングのための活動支援金を提供します。

## ■ みちのく復興インターンシップ(対象:被災地域リーダー、大学生・大学院生)

復興プロジェクトに、被災地域外から大学生インターンをコーディネートすることで、高齢化・人口減少が進む被災地への若者の参画を進めていきます。2013年度は、トライアルでの実施を進めながら、受け入れ地域の体制整備や首都圏の大学との連携など、本格実施に向けた準備に取り組みます。

【目標】インターンシップの制度づくり(2014年春休みからの実施)

### ◆ マイ・プロジェクト for Tohoku

主に2012年度までに復興プロジェクトでのインターンシップを経験した大学生を中心に、被災地での経験を通じて得た問題意識を、具体的なプロジェクトとして企画・実行することをサポートします。

## ■ みちのく復興事業パートナーズ(対象:被災地域リーダー、都市部企業)

都市部の大企業が持つリソースを活かしながら、「ヒトづくり」「コトづくり」を軸としたリーダー、右腕、起業家への支援を目標とします。さらにはその継続的な関係を後押しする社員参画の機会を創出することで、企業の東北支援を盛り上げていきます。

【目標】年間10社の参画、年間1500人の社員と被災地との接点づくり

### ◆ 社員派遣「損保ジャパン社員派遣プログラム」

第2期となる今回は、南相馬市で自然エネルギーをフィールドとした子どもたちへの体験プログラムを開催する「南相馬アグリパーク」への派遣が決定しています。

### ◆ キャパシティビルディング「ベネッセ・電通みちのく創発キャンプ」

2013年7月5日6日に、被災地域のリーダーや右腕、スタッフなどを対象に、チームビルディングを目的とした研修合宿を開催します。今後も企業の持つ専門性を活かしたキャパシティビルディングのための研修を実施予定です。

### ◆ 株式会社東芝が新たにみちのく復興事業パートナーズに参画

福島復興に取り組む団体を人材面で支援するため、福島エリアで右腕派遣のマッチングに取り組むコーディネーターの活動を支援します。

## ■ 【新規】「ハブ機能」強化支援(対象:被災地域リーダー・メンバー)

今年度より新たに、「ハブ機能」の強化を目的としたプログラムをスタートします。地域住民や事業者の自発的なチャレンジを支えるために、地域内外の経営資源(特に人的資源)をコーディネートする、ハブのモデルを創出することを目指します。

【目標】年間10地域との協働の実施、3~4地域との強化プログラムの実施、合計30名への研修機会提供

### ◆ 「復興のための日米リーダー交流プログラム」

人材・資金・情報といった復興リソースを国内外から集約し、東北の自立的復興に活用していく「ハブ機能」の強化支援を目的としたプログラムです。

東北の復興に取り組む方々を米国へ短期派遣し、災害からの復興と地域コミュニティの再生に関する先進事例に触れるとともに、米国の専門家を日本に招聘して東北の視察や一般公開のフォーラムを行います。これらの訪問と招聘受入れの前後には、参加者間でのワークショップ等も定期的開催し、海外で得た知見の東北における実践をサポートしていきます。

### ◆ モデルとなる「ハブ機能」の創出支援

特に今の被災地で求められている「人的資源(専門家や大学生インターン、企業ボランティア、右腕、地元の若者等)」を、地域住民や事業者主体の事業・プロジェクトに対してつなげていくことを担う「ハブ機能」の強化を目的としたプログラムを実施します。そのために、3~4のモデル地域への資金支援や協働でのプログラム開発(スタートアップ支援やインターンシップなど)に取り組みます。今年度より3年間でモデルの創出に取り組みます。

### ◆ 「地域イノベーター養成アカデミー」

国内の地域再生の先進事例への視察ツアーを実施します。地域資源を活用した観光や物販、新たな自治機能の創出などに取り組む地域のハブ組織から、そのノウハウを学びます。また、主に東京を中心とした都市部より、プロボノとなる若手社会人の巻き込みを目的とした、被災地での受け入れツアーも並行して実施します。



### ■ みちのく復興パートナーズ:みちのく復興事業シンポジウム(3月13日)

企業が連携して復興支援していくことの意味や、企業にとっての社会貢献活動の新たな形を多くの企業のCSR担当者や関係団体と共有することを目的に、参画企業5社による初の共催イベント「みちのく復興事業シンポジウム」を電通ホールで開催しました。

イベントには企業を50社を含む200名を超える参加があり、セッションでは東北の自立的復興に向け、企業本来のマネジメント力へのニーズが大きいことや、企業の社会貢献活動を継続するための位置づけとして、イノベーションとモチベーションというキーワードが出され、日本企業の経営のヒントになっていく可能性について話が出ました。



### ■ みちのく仕事:右腕募集説明会&プロジェクト活動報告会(4月14日)



右腕募集中のプロジェクトのうち、5つのプロジェクトの関係者を招いて、各プロジェクトのプレゼンテーションをおこないました。東京にお越しにできなかったプロジェクトとはスカイプで現地とお繋ぎし、来場者とインタラクティブにお話いただきました。参加者(21名)からは、「東北から新しい事業が具体的に始まっていることが分かり勇気づけられた」「右腕としてプロジェクトに関われるよう家族を説得する」などと言ったコメントをいただきました。

#### ■ 募集プロジェクト一覧

- ・復興応援団 南三陸民宿スタートアップ
- ・WATALISてしごとプロジェクト
- ・木質バイオマス普及プロジェクト
- ・YES工房商品力強化プロジェクト
- ・気仙沼スマートシティ

## ■ 右腕合宿(5月11日～12日)

今回で6回目の右腕合宿。場所はいつもの宮城県仙台市郊外の秋保・木の家で開催されました。参加人数は28名(初参加の方が約8割)で、始めて他の右腕と出会う人もいました。今回はゲストに東北フューチャーネットワークのBob Stilger氏と岩井秀樹氏らをお招きし、1日目は「東北のコミュニティにとって、今重要な課題とは？」というお題をもとに、ワールドカフェを実施。2日目は、右腕自身が話したい課題や問いをもとに対話を行うことや、粘土を使って自分の仕事や生活において現在置かれている状況や起きている可能性を表現するといったワークが行われました。

右腕からは「自分の想いを伝える・表現する難しさを感じた」や「今の状況を整理できたことで、客観的に考えることができた」、「同じ右腕同士話し合える機会があったことが大変勇気づけられた」などの声をもらいました。



## ■ フューチャーセッション:東北のイノベーションの未来(6月7日)



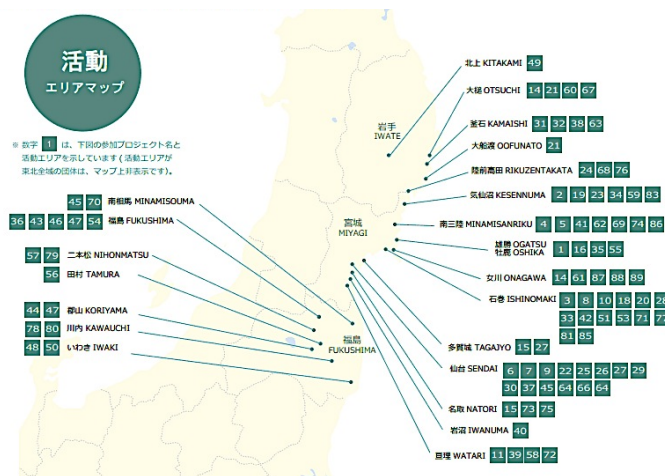
「東北でリーダー、右腕、復興支援員、インターンなどが相互に学び合う生態系をいかにつくるか？」をテーマに、震災から3年目を迎えた東北における、現地と支援の相互関係についてディスカッションを行いました。今回のセッションでは、震災復興リーダー支援プロジェクトチームメンバーに加え、実際に現地で支援活動を続けてきた外部のゲストも交えて、活発なディスカッションが行われました。議論を進める中で、

- ①右腕自身の成長
- ②右腕が関わるローカルコミュニティの変容
- ③システム全体の変容

の3つの問いを導き、これらの問いについてさらに議論を深めました。セッションを終えて、我々自身も主催者ではなくシステムの一部であることを意識する、常に「学び」を中心に置く、といったキーワードを得、今後ETIC.としてどう貢献していくか、改めて見つめ直す良いきっかけとなりました。

## 6 プロジェクトの進捗

2013年6月11日の時点で、78のプロジェクトに145名(派遣準備中10名含む)の右腕人材を派遣してまいりました。派遣期間が終了した右腕人材の37%が継続して被災地に残り、そのうち8名は自ら起業するなど、彼らは被災地での重要な役割を担いつつあります。「みちのく復興インターンシップ」には計303名の大学生が参加し、「みちのく起業」では、計50件の新規創業・新規事業設立を達成しました。当初設定した目標である3年間で200名の派遣に向け、今後も精度の高いマッチングと各種サポートを行ってまいります。



## 7 ご支援・ご寄付のお願い

本プロジェクトについては、スタート以来、国内外の個人・団体・企業の皆様より大きな関心を頂戴し、現在のご寄付・助成金等の総額は、入金見込額も含めて、678,597,467円という多額のご支援をいただいております。この場をお借りしまして、改めて心より感謝申し上げます。しかしながら、中核事業である右腕派遣プログラムへのニーズは、東北の復興が本格化していくこれから、更に高まることが予測され、また長期的な復興を支えていくための持続可能な仕組みづくりも急務となってきています。そこで、私たちは、この2年間の活動を踏まえて、2013年度より新たに3年間の中長期計画を策定致しました。右腕派遣は初期に設定した「3年で100名」から、既に倍増の「200名」派遣へと上方修正しておりましたが、「5年で300名(これから150名)」へと、さらに修正して取り組んで参ります。目標の変更に伴い、総予算額も、2013年度からの3年間で6億円以上の規模となる予定で、残り約2億4千万円ほどの資金調達に向けて、改めて資金調達戦略の強化を実施してまいります。皆様におかれましては、「震災復興リーダー支援基金」のPRへのお力添えはじめとして、事業連携や各プロジェクトへの個別のご協力など賜りますようお願い申し上げます。 >>寄付ページURL  
[http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/donations\\_support/please\\_donate](http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/donations_support/please_donate)

### 「ご寄付の受付」

■信頼資本財団「震災復興リーダー基金」  
<http://www.shinrai.or.jp/fukkou-shien/etic2/>  
※公益財団法人である信頼資本財団は、特定公益増進法人に該当するため、寄付者の税は確定申告をすることによって寄付金控除の優遇措置を受けることができます。

■Global Giving  
<http://www.globalgiving.org/projects/sponsor-fellows-for-tohoku-and-japans-recovery/>  
※米国在住の方は、GlobalGivingから寄付していただくと、税控除を受けることができます。

■American Express (メンバーシップ・リワード)  
[http://catalogue.membershiprewards.jp/viewAwardDetail.mtw?productId=4487681&categoryName=ip\\_21a\\_charity\\_tohoku](http://catalogue.membershiprewards.jp/viewAwardDetail.mtw?productId=4487681&categoryName=ip_21a_charity_tohoku)  
※アメリカン・エクスプレスのカード会員さまは、ポイントによる寄附ができます。

### 連絡先・お問い合わせ先

◆NPO法人ETIC. 内 震災復興リーダー支援プロジェクト 事務局 (担当：山内・田村)

東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階

mail : [fukkou@etic.or.jp](mailto:fukkou@etic.or.jp) Web : <http://www.etic.or.jp/recoveryleaders/index.html>